

アジアの時代をどう生きるか

大学院国際協力研究科長 山下 彰 一



入学おめでとう。
間もなく二十一世紀が始まる。これからの時代は、国際的にはアジア諸国との関係が重要度を増し、国内的には人間関係や自然が大切なテーマになってくると考えられる。

最近、日本にはいい話がない。経済は沈滞ムードが漂い、政治や社会も展望がない。これから一体どうなることだろう。アジア諸国の発展とは逆に、日本のこれからの景気は緩やかな下降線をたどり、国内では縮小均衡路線を取らざるを得なくなるだろう。縮小均衡ということ、パイが小さくなることとであり、当然その配分を巡って混乱や争いが起こる。

その結果、生活スタイルは変わり、人間関係は今よりもギスギスし、いやな世の中になる。不愉快だが辛抱しなければいけない、そんな社会になるのではないか。それだけに人々は余計に人を恋しがり、人間関係を今よりもっと大切にすか、あるいは人間嫌いになって自然や素朴な生活に関心を向けていくかも知れない。

世界的に見ると、政治でも経済でも

アジアが大きな役割を担うようになり、精神文化においても豊かな伝統と遺産をもつアジア的な価値が再評価を受けよう。日本は、大学を含めて、アジア諸国との交流の意義を見直し、人的、文化的交流を盛んにすべきである。諸君は、この趨勢を見誤らないように、いつかアジアの人たちと一緒に働いたり、研究協力をすることを想定し、今からその日に備えて欲しい。

大学院国際協力研究科は、そうした希望を持つ学生のために創設された。アジアからの留学生と一緒に、これからアジアで働こうとする学友とここで勉学に励み、友情を育んで欲しい。
(やました・しょういち)



IDEC 研究棟完成予想図

ようこそ！ IDECへ！

国際協力研究科博士課程前期

齋藤 一彦

新入生の皆様、ご入学おめでとうございませう。みなさんは今、夢と希望で胸を膨らませておられることと思います。

国際協力といえば即座に開発援助と考へがちですが、深刻な地球規模の課題への対応を迫られている今日、多岐にわたる分野間の研究の協力が重要であるといえます。しかし現時点では、国際協力は「学」として成立している

わけではなく、また、先人のあまり踏み込んでいない領域でもあります。そのような中で、ひとつの方向性を見いだしていくことは非常に困難です。これは研究に片足をつっこんでいる私たちも痛切に感じているところです。

力的なことだと思いませんか。そのためには、研究専門分野を越えたタテ・ヨコのネットワークの構築が不可欠です。幸い、IDECはさまざまな専門分野・国籍・年齢・経歴の学生により構成されています。そのような学生と交流をもつことは研究のためだけでなく、いろいろな意味での社会勉強にもなると思います。実際、私も多くの留学生と接したり、さまざまな経歴をもった人々との出会いを通じて、たくさんのお話を聞くことができました。

今年度、ついに待望のIDECの校舎ができます。これまで、研究室がばらばらで交流がとりにくい状況にありましたが、それも改善され、学際的領域にふさわしいネットワークが構築されることでしょう。そして、みなさん、われわれと共に、「国際協力」の学問づくりをしていきましょう。

……というようなことを、まずは飲みながら語るべきでしょう。
(さいとう・かずひこ)



IDECは国際協力研究科 (Graduate School for International Development and Cooperation) の略称です。